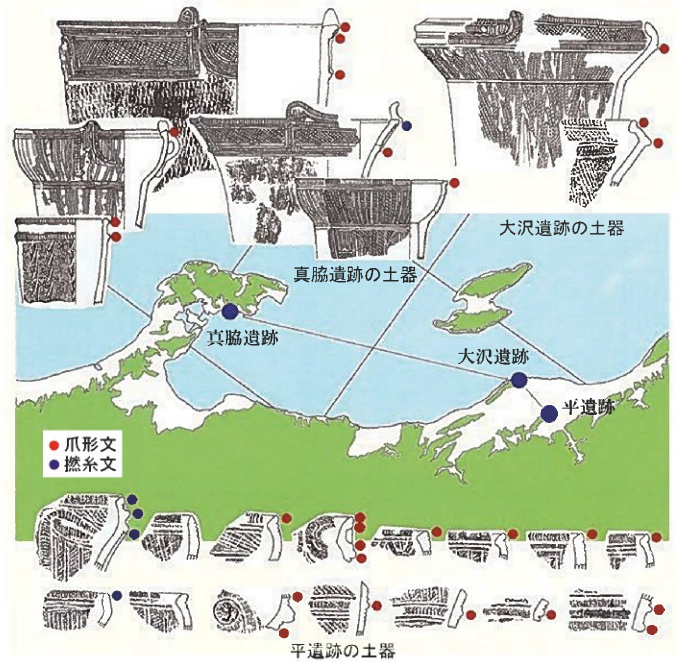


集落成立期の土器

平遺跡に集落が現れるのは中期初頭の段階と考えられます。この時期の平遺跡の土器は、越後平野周辺で一般的に作られた土器とは異なり、口端や隆帯の上に爪形文を盛んに施す点で北陸地方との共通性がみられます。

越後平野の西縁に位置する角田山は日本海のランドマークをなしており、山麓の遺跡は北陸地方との強い結びつきがありました。角田岬に近い大沢遺跡では前期最終末の土器に高い頻度で爪形文を施し、この遺跡が平集落の成立に大きく関わったことをうかがわせます。



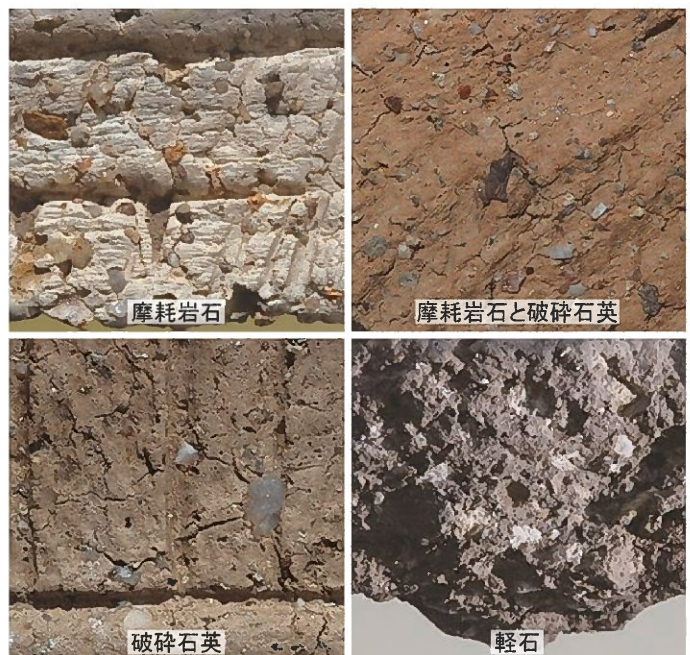
砂を貯えた土坑

2020年の調査では、中期前葉に形成された黒色土の上面で遺構探査を行い、多数の柱穴や土坑を見出すことができました。中でも注目されるのは、多量の砂が下部に堆積する9基の土坑です。長さ幅50cm～70cm台、深さ20cm未満の掘り込みで、砂の量は最大8kgにおよびます。このうち1基の砂粒は破碎した石英・長石と雲母を主体とし、花崗岩を粉碎した可能性が高いものです。残り8基は磨耗砂が大半を占めます。福島県沼沢火山起源の軽石が混じることから、阿賀野川の砂とみなされます。共伴土器に基づけば、これらは中期前葉と後期前葉の二時期にわたる遺構とみられます。



土器の混和材

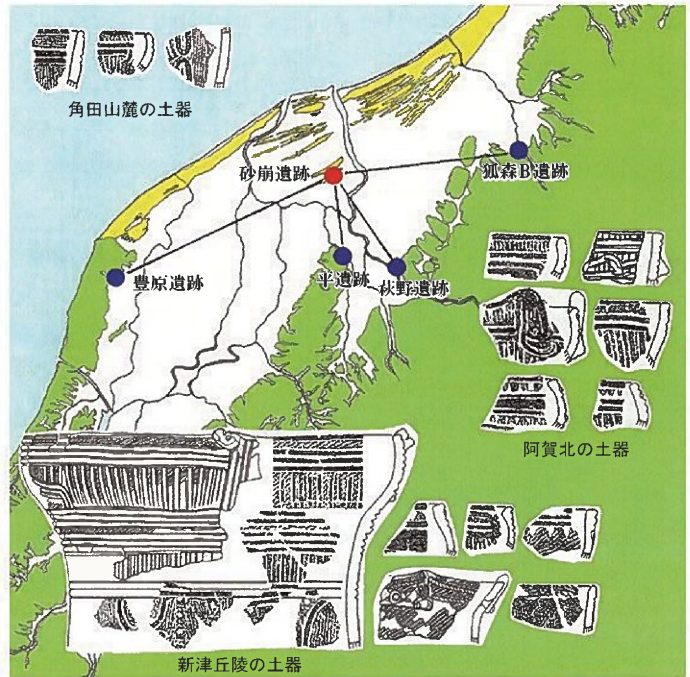
平遺跡の縄文土器には様々な粒子が混じります。焼成を前にした乾燥期間のひび割れを防ぐため意図的に混ぜ合わせたものです。最も一般的な含有物は、磨耗した岩石粒子です。阿賀野川の砂に類似し、土坑内に集積された砂はその貯蔵例と考えられます。中期前葉土器の半数は破碎した石英を多量に含みます。花崗岩を粉碎した可能性が高い含有物です。このほか阿賀野川で採取した軽石や新津丘陵産黒曜石を粉碎して混ぜ合わせる例もあり、周囲の資源を有効に利用した土器作りがうかがえます。



土器から見た人の動き

平遺跡の北11kmに主として中期前葉に形成された砂崩遺跡^{すなくずれ}があります。この遺跡ではこれまで多量の土器がえられていますが、土器作りに不向きな砂丘地に立地し基本的な生活用具も揃っていないことから、交易などを目的としたキャンプ地とみられます。

砂崩遺跡の土器はバラエティーに富みます。磨耗砂を含み平遺跡の主体を占める土器^{かじ}、加治川^{かじ}や笹神丘陵の河川砂と同様の粒子を含む土器、含有物が乏しく角田山麓^{とよぼら}の豊原遺跡特有の文様を施す土器などです。いずれも各地の集落から持ちこまれた土器と考えられ、当時の活動範囲を知るうえで重要な情報を提供してくれます。



石油資源の利用

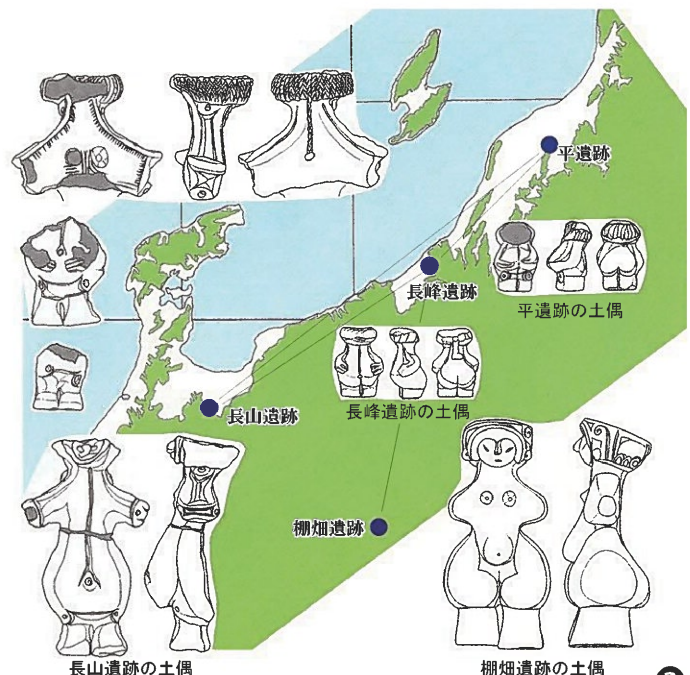
2020年の調査で新津丘陵産原油に由来するアスファルトの塊とアスファルト付着土器が出土しました。前者は純度の高い精製品と砂粒が混じる精製滓からなり、ともに後期前葉の柱穴から見つかりました。後者はアスファルトを深鉢の中で加熱した際に付着したもので、中期初頭と後期前葉の土器で確認できました。これらは新潟県内の石油資源の利用が5,500年前に本格化するとともに、平遺跡の二つの集落形成期間をつうじアスファルトの加工が行われたことを物語ります。



中期前葉の小形完形土偶

全長3.9cmたらずの土偶が黒色土の中から見つかりました。顔面が欠けていますが、本来は無傷のまま埋まっていたとみられます。

同一サイズで形態も類似する完形品が上越市長峰遺跡^{なかもね}から出土しています。二つの土偶には、お下げ髪と玉抱き三叉文の有無やお尻の張り出し方に違いがありますが、新潟県内で数少ない遠隔地の製作情報を取り入れる点で共通します。この種の小形完形土偶は特殊な能力を持ったシャーマンのような人物の所持品とする見方もあり、土偶の使われ方を考えるうえでも興味深い資料です。



古代の岡崎・道正遺跡

1) 沈んだ砂丘の発見

岡崎遺跡と道正遺跡は新潟中央環状線建設に先立つ試掘調査で平成30年に発見されました。現在は水田が広がる江南区割野地区の地下に亀田砂丘の続きが沈んでいて、縄文時代から人々が生活していた痕跡が現れたのです。令和元年～3年に本発掘調査を行った道正遺跡では、縄文時代晩期、古墳時代前期、平安時代の生活面が残っており、建物跡などとともに多量の遺物が出土しました。令和2・3年度に調査した岡崎遺跡は道路を挟んで道正遺跡の150mほど西に位置します。砂丘の頂部は削られていて建物跡は見つかりませんでしたが、縄文時代から平安時代に至る遺物が出土しました。両遺跡の間にはかつて川が存在していたことから、それぞれ別の遺跡として登録していますが、古代の遺物はともに9世紀後半を主体としており、強い関連をもって営まれていた遺跡と考えられます。ともに令和5年度報告書刊行にむけ整理作業を進めており、今回の展示では、整理作業の進んでいる平安時代の様相を探ります。



岡崎遺跡と道正遺跡（1988年撮影航空写真）



遺跡遠景（西から亀田砂丘を望む）

2) 物流の拠点を示す遺構と遺物

道正遺跡ではほぼ同じ向きの掘立柱建物が9棟みつかりました。同じ位置で2～3回の建て替えがあったようです。6棟が総柱（倉庫）でそのうち3棟には床束柱が確認できました。岡崎遺跡では建物跡は不明ですが、鍛冶炉の可能性のある遺構と北側の低地との境を仕切る柵がみつかりました。

このような遺構のあり方とともに、硯に転用された土器が多いことや岡崎遺跡で棹秤の錘、役人が使う石製の腰帯飾りが出土していることなどから、役所に関する人物がいて物流を管理していた場所と考えられそうです。



棹秤の錘（権状錘）



石製腰帯具の鈍尾（表・裏）

3) 平安時代の焼き物とその諸相

焼き物の器で主体を占めるのは現在の新潟県域で作られた土師器・黒色土器・須恵器で、他には東海地方産の灰釉陶器、産地不明の暗文土師器が各1点あるのみです。

硯に転用されたものとともに、墨書も多くみられます。この時代の墨書は遺跡ごとに独特なものも多く、この時代の墨書は遺跡ごとに独特なものがありますが、岡崎遺跡にも他には例のないものがあります。特に能登の地名である「羽咋」は5点もあり、注目されます。食器以外では、水や酒などを入れる貯蔵具には須恵器、火にかける鍋釜には土師器という材質に応じた使い



岡崎遺跡出土の食膳具

土師器作りの二つの流れ 現在の新潟県産の土師器には、須恵器の製作技法を取り入れたものといないものの2種類が存在します。

新潟県域は当時佐渡国と越後国に分かれており、須恵器の技法で作られたものは地元越後の土師器です。他方須恵器技法を用いないのは佐渡の土師器の特徴で、越後の多くの遺跡で客体的に出土することがわかっています。岡崎・道正遺跡で出土したすべてが佐渡産かどうかはまだ確定はできませんが、その独特の質感からその可能性は高いと思われます。

越後の土師器 越後では食器と煮炊き具が作られていました。煮炊き具には丸底の鍋釜とより小型の平底の鍋があり、直接火にかけた調理具はこの3種と考えられます。煤け方や焦げ付き具合から、長甕は作り付けのカマドにはめ込む湯わかし釜で、その上に甕を置いて米を蒸し、小甕は直接火床に置いて汁物を調理したとみられます。丸底の鍋はカマドにかけたと思いますが、小甕に比べ内容物の焦げ付き跡が少ないことからゆでものや炒めもの用だったのででしょうか。

佐渡型甕と可搬式（移動式）カマド 佐渡の特徴をもつ土師器は煮炊き用の甕形のもので、「佐渡型甕」と呼んでいます。長胴でない丸底で、口縁部が大きく開き体部が薄手なのが特徴です。サイズには大小があり、岡崎・道正遺跡合わせて30個体近くが出土しています。

この土器と共通する質感をもつカマドも出土しました。前後にたきぐち焚口がある独特な形の持ち運び可能なカマドで、佐渡で主体的に出土するものです。径の大きい佐渡型甕とセットで使われたと考えられます。径の小さいものはやはり火床に直接置いたと考えることになりませんが、道正遺跡で出土している短い円筒形の土製品で丸底の土器を支えていたのかもしれませんが。

越後での佐渡型甕と可搬式カマドの出土例をみると、佐渡型甕単独の例が多いですが、両方出土しているのは西区的場遺跡・緒立C遺跡、東区山木戸遺跡に岡崎遺跡を加えて4例となりました。

これらがすべて佐渡産であるとすれば、佐渡の人が持ってきたか、佐渡に行った人が持ち帰ったかのどちらかです。小泊窯製品や水産物を運ぶ海運を担った佐渡の海民の旅の道具ではないかという説も最近提唱されています。論証すべき点は残っているとしても大いにありそうなことではないかと思われます。

越後の土師器に見る叩き技法の跡 須恵器の技法といえばロクロの使用が最たるものですが、大きい鍋釜には叩き技法も使われ、その道具の圧痕がよく残っています。外面には平行線状や格子状に並ぶ凸凹、内面には同心円状や平行線状、放射状の凸凹などがあります。そしてへこみの底にはかなりの頻度で木目がみられ、これらの道具の多くが文様を刻んだ木製品であったことがわかります。長甕では丸底を作る段階に道具を取りかえており、特に内面では平面小判形の緩やかな曲面に平行線を刻んだ専用のものが多用されています。内面の同心円文は須恵器の伝統的文様であり、丸底を作る場合にも使われてきましたが、平行線文の道具が現れてからはそれが主流になったようです。

土器製作での布の利用 須恵器横瓶よこべの内面と、土師器小甕外面の底部近くに布目のみられるものがあります。横瓶のものは大変珍しい痕跡で、俵形の胴部の片側に広くみられますが、器面は凸凹があり、布が平らに貼り付けられていたわけではないようです。小甕のものはごく狭い範囲で、いずれもどうすればこのような



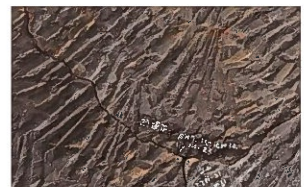
越後の鍋の底



可搬式カマド



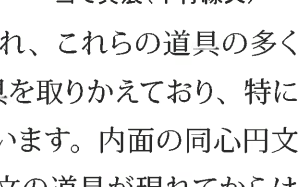
叩き目（平行線文）



当て具痕（扇形？文）



当て具痕（平行線文）



布の跡（横瓶）

痕跡が残るのか悩むところですが、土器作りにおいて意外に布が活用されているらしいことがうかがい知られます。

須恵器で布目をもつ例としては、上越市の滝寺古窯跡群と江南区曾我墓所遺跡出土の甕があり、前者は成形中に割れた口縁部を補修した際のもの、後者は口頸部と体部の両者にまたがって布が貼られていた痕跡が接合部の粘土の剥落した部分で確認できます。補修や接合の際に乾燥を防ぐためのものでしょうか。

布目といえば古代瓦にはよくみられるもので、型はなれをよくするのが最大の目的と思われませんが、切ったり貼ったりが多い須恵器では補強や保湿が目的となったのでしょうか。

佐渡の須恵器の気になる凸凹 9世紀後半には佐渡で大規模な須恵器生産を行うようになり、作るのをやめた越後では専ら佐渡の須恵器を使うようになります。窯は佐渡市羽茂の小泊^{ほもち こだまり}一帯にあり、須恵器と瓦が作られていました。特に出土の多い無台杯はいくつも重ねて焼かれた量産品です。今回出土した須恵器もほとんどが小泊窯産ですが、よく見るとちょっと変わった凸凹を残すものがあります。

凸凹①=無台杯口縁内側または外側にめぐるくぼみ 小泊窯製品のすべてにあるのではなく、位置にも高低あり、くぼむ程度も様々です。単なる作り手のくせなのではとってしまえばそうかもしれませんが、この形を作る技法がどんなもので、その意図は何なのかが知りたいところです。この部分をさらに詳細に見ると、くぼみの中に斜めに走る細い筋があり、外面の同じ高さにもみられます。傾きには左右があって、ロク口の回転方向とも関係しているようです。この痕跡の解釈として、回転中に両面から挟んで強く引き上げる動きを加えたことが考えられます。強い力のため力が加わった部分がくぼみ、回転による水平方向の力と加えられた垂直方向の力が作用して、傾斜する痕跡が残ったのではないのでしょうか。

この作りの意図するところについて、折縁杯^{おりふちつき}のような器形が目指された、あるいは重ねて焼く際に融着しにくくなる、これをベースとして杯蓋を作る際に口縁端部が折り曲げやすくなるとか何か利点があった、そもそも杯蓋を作ろうと始めたが杯のままになった等々、いろいろ考えられそうです。

凸凹②=無台杯外面のこぶ 結構大きなこぶですが、粘土紐を積み上げて成形する過程の凸凹をならしていないのでしょうか。このような凸凹があっても出荷しているとは…特に気にすることではなかったのですね。

凸凹③=盤・壺の見込みにある細かい凸凹 くぼみの一つ一つをみると同じ形が繰り返されており、平らで先端がすぼまる形の工具を押し付けたようです。なぜこんなに跡が残るのかはさておき、現代の陶芸でも使うような道具を使っていたことがわかります。



布の跡(小甕)



凸凹①



凸凹②



凸凹③(小壺)

主催・問い合わせ先

新潟市文化財センター TEL 025-378-0480
〒950-1122 新潟市西区木場 2748-1 FAX 025-378-0484
<https://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun/index.html>

開館時間 / 平日 午前9時～午後5時
土・日・祝日 午前10時～午後4時
休館日 / 月曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日、5月9日



企画展関連講座・展示解説

※申し込み不要

会場はいずれも
新潟市文化財センター研修室

5/20^土

午後1時半～午後3時

「縄文時代の平遺跡を探る」

講師/前山精明(新潟市文化財センター学芸員)

6/24^土

午後1時半～午後3時

「いろいろな跡から考える新潟の平安時代」

講師/奈良佳子(新潟市文化財センター文化財専門員)